編集後記

「北の果て一人生きる・浜下福蔵九十二歳」。礼文島の北端。「毎日、楽しむことを努力する」。「働いている時はつらいけど、酒飲んで人と再会することが一番の喜びだ」。習字の腕もすごい。自立。■『水源地』第四号、ディジタル版完成。これも自立しているお二人の努力のたまものです。すなわち吉澤編集長とクニージニク村野さん。周囲の方々は両名に青眼を向け、「ご苦労様」と声をかけます。こちらには白眼。「相変わらず何もしていないのか。それで最後に発行者の名前を騙るとは呆れるぜ」と相成ります。■まあ、お許しください。とにかく無事に編集後記までたどり着きましたので。しかし、第三号の吉澤編集長の編集後記の言葉が身に沁みますね。（粕谷）

☆　☆　☆　☆　☆

本誌前号の発行が昨年二月一日。同月二十四日ロシア連邦軍がキーウ（キエフ）へと進撃開始。だが陥落とはならず、今もウクライナ全土での戦火が収まらない。■昨年、プーチンの核兵器使用の威嚇発言にはひやひやさせられた。　原発敷地内への攻撃にもぞっとした。一体この戦争（プーチン曰く「特別軍事作戦」）はどうなるのだろうか。■今回、本誌にベラルーシの辰巳雅子氏とその日本語教室の教え子たちによる『二十四の瞳』ロシア語訳テキスト(快挙だ！）が掲載された。全世界のロシア語ネイティブや学習者に読んでいただけたらと心から願う。■辰巳氏グループは二〇一六年にミンスクで単行本『ごん狐』(Лисёнок Гон)を刊行した。その中には新美南吉の十四作品のロシア語訳が収められた（これも快挙）。『牛をつないだ椿の木』もある。主人公の末路を私は忘れていたが、岩波文庫で再読すると、こうだった。「日本とロシヤが、海の向こうでたたかいをはじめていました。海蔵さんは海をわたって、そのたたかいの中にはいって行くのでありました。」そして「ついに海蔵さんは、帰って来ませんでした。勇ましく日露戦争の花と散ったのです。」■戦争で人も生物も「散華」する世界は真っ平御免と行きたい。（村野）

☆　☆　☆　☆　☆

今号は発行人の手抜きにより、原稿の数はあまり集まりませんでしたが、村野氏のネットワークに支えられて、かなりレベルの高い作品が集まりました。これで敷居が更に高くなったと感じられた方もいらっしゃるかもしれません。次号は粕谷発行人の奮起に期待したいところです。■今号の圧巻は、何と言っても『二十四の瞳』ロシア語版です。ベラルーシの辰巳氏の御尽力に改めて感謝申し上げます。ありがとうございます。■「水源地」は前号から完全ディジタル版に移行しておりますが、それをよいことに自身の作品は発行ギリギリまで粘って書き上げました。こういう尻に火の点いた状況での高揚感を感じる機会は貴重です。（吉澤）

水源地　第四号

発　行　二〇二三年二月一日

編　集　水源地編集委員会

発行者　粕　谷　隆　夫

〒三〇〇―二七四一

茨城県常総市国生一三八〇番地

電話　〇二九七―四二―〇六二五